



どくとるマンボウ追想記

北杜夫

中央公論社



どくとるマンボウ追想記

© 1976 検印廃止

昭和51年1月10日 印刷

昭和51年1月25日 発行

著者 北 杜 夫 発行者 高 梨 茂 印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社 東京都中央区京橋2丁目1番地 振替東京2—34番

どくとるマンボウ追想記 目次

第一章 はじめての記憶

第二章 出生などについて

第三章 ふたたび出生について

第四章 山や海のこと

第五章 小さな押入れのことなど

第六章 腎炎の影響

2

18

33

49

66

83

第七章	初めての中学生生活	97
第八章	太平洋戦争が始まる	114
第九章	次第に中学生へ	131
第十章	戦争色強まる	149
第十一章	工場動員時代	166
第十二章	ついに戦災に遇う	182

装幀・カット 佐々木侃司

どくとるマンボウ追想記

第一章 はじめての記憶



覚えていない。おどろくほど何も覚えていない。遙かに霞んだ遠いむかし——すべては淡々しい霧の帳とばりの中に薄れている。それが記憶というものの本質とはいえ、なにかうら寂しい思いがする。

私の最初の記憶は、丈よりも高く生い茂った雑草のつらなりである。草の先のほうには小さな花がついている。まわりに白い花瓣があり、中心は黄色い。その無数の花は、私の顔の高さか、あるいは頭の上にある。そういう小花をつけた雑草が見渡すかぎりつづいている。幼児の目には、それが海のような涯はてのない広がりをもって見える。

あとからの知識と考えあわせれば、それはヒメムカシヨモギという雑草であった。北米の原産で、明治の頃渡来したため明治草ともいわれ、また鉄道の線路ぞいに伝播したため鉄道草とも呼ばれた。生命力が強く、焼跡などの空地に真先に繁茂してくる。私の家は病院ともども大正末期に失火で焼けた。そのあとにこの草が繁茂していたのである。

ともかく、びっしりと繁茂したヒメムカシヨモギの間の道で私は遊んでいる。そうすると、雑草の海をへだてて、もう一本の道が平行につづいていて、そこを誰かが歩いている。白い服を着た女の人らしいが、病院の看護婦なのかどうかも定かではない。ヒメムカシヨモギの丈は高く、普通に歩いているとその姿は見えない。のびあがると、雑草の葉と小花ごしにその白い姿が見える。ヒメムカシヨモギの間の道のむこうには、病院の平たい家屋が這いつくばっているように低くつづいている。

その病院は、火難後のブラック建築のものはずだが、単に低い家屋があるというふうにしかな記憶に残っていない。

その前にあった私の祖父が建てた病院は、外国の宮殿まがいに七つの塔と数十本の円柱が林立していた由だ。といっても実は木造建築で、表面にだけ石が貼りつけてあったのである。それでも残っている写真を見ると堂々としたもので、とても石を貼りつけたものとは見えない。祖父は「榆家の人びと」のモデルとして書いたとおり、政治なんぞにも手を出し、見栄坊で、調子がよく、口先のうまいハッタリ屋であったようだ。代議士に一度なり、そのあととは落選し、しまいに市会議員、町会議員にまで出馬して落選した。しかし臨床医としての腕前は確かであつたらしく、その以前浅草の流行医として繁昌し、やがて青山の地に一見宮殿のような病院を建てた。

そして、それは精神病院であつた。精神病院という名称は近代的なもので、つまり脳病院、気ちがい病院、癲癇病院であつた。世間からは異様な目で見られるし、そこに生れた子供たちもなにがしかの負目をもつように思われる時代のことである。

かつて私の父——茂吉という歌人であった——は、

かの岡に瘋癲院のたちたるは邪宗来より悲しかるらむ

と、うたった。

だが、その病院は大正十四年の暮、恒例の餅つきのととの火の不始末のために全焼した。私の知っているのは、そのあとに建てられた貧弱なバラックの病院である。祖父は私の生れた翌年に死んだ。従って、私は祖父のおもかげをまったく知らない。

ともあれ、焼跡の敷地の隅にこれも焼残りの自宅があり、ずっとむこうに貧弱な病院があり、その間は一面にヒメムカシヨモギの群落で埋めつくされていたらしい。もっと大きくなってから、この植物は更に私になじみぶかいものとなったが、いま覚えているもっとも古い記憶は、海のように広がるヒメムカシヨモギのつらなりと、そのむこうにちらちらする白い服を着た看護婦らしい人影なのである。

もう一つの記憶。階段の中途に腰かけて私はじっとしている。その階段はかなりの勾配で、黒ずんだ赤い絨氈が敷いてあり、窓がないため昼間でも電氣をつけないと極めて薄暗い。その段の一つに小さな私は腰をかけ、息をひそめている。薄暗い。なんのために息をひそめているのかはわからないが、一人ぼっちで限りなくじっとしている。いくらか怖いような気分である。手で下に敷いてある絨氈にさわる。柔かなざらざらした手触りがする。そのまま、なおじっと息をひそめている……。

これが、私の幼少期における唯一の、後年、文学などにかかずらうようになった面影であった。のちに小学生になってから、父のところに弟子たちがきて歌の添削などをやっていたとき、姉や私は和歌や俳句をつくって父に見せた。私の句。

「コオロギがコロコロと鳴く秋の夜」

父はおもしろ半分になんを見ても、べつに何にも言わなかった。これでは添削しようにも不能であつたからにちがいない。

ともあれ、その薄暗い部屋を昇った二階が、幼い子供たちとは関係ない父母の部屋々々となつていた。正面が私と十一歳違う兄の和室で、右手が母の部屋である。いずれも和室だったが、母の部屋は絨氈が敷かれたりして、いささか洋風にしつらえてあつた。

私は幼少期の体験を、もちろんフィクションをまじえてだが、長編「幽霊」や「榆家の人びと」にかなりくわしく書いている。それで多少重複することになるのをお許し願うとして（この文章にはフィクションはない）、母の部屋で私がもっとも誘^うかれたものは化粧台であつた。

その中央の大引出しを開けると、香水やローションなどが並んでいて、なかでも可愛いゴム球のついた香水吹きなどはもの珍しかった。そのうえ、そこにはダイヤモンドや真珠の——と私はずっと信じていた——腕輪や首飾りが無造作におかれていて、まさしく宝物の宝庫といつてもよかった。糸が切れて、カットされたダイヤモンドの粒がころがっていたりした。

そのダイヤや真珠が実は模造品であつたことを、私はずっと後年になって知った。

しかし、母がかなりの本物のダイヤモンドを所有していたことも事実である。太平洋戦争も形

勢がおかしくなったところ、政府が民間人からダイヤを供出させたことがある。兵器をつくるのに必要だというのだ。母はてきぱきとものを選ぶ決断の早い女だったから、自分の所有するダイヤをすべて即日、供出してしまった。

ダイヤの供出運動は、しかしはかばかしくなかった。そこでそれをうながすため、朝日の記者が三越のダイヤ供出本部に調べにいった。すると、その時点でいちばん量の多かったのが三井の総本家で、その次がずっと桁ちがいに少ないとはいえ、母であった。そのことは当時の新聞に出た。

戦後の二、三年、私の家は戦災にはあつたし、預金も封鎖されてしまふし、かなり苦労した。いま兄が医院をひらいている四谷の土地を買うとき、青山の焼跡やそのころ住んでいた代田の家を売ってもとでも足りず、母は独断でI書店から莫大な借金をした。

当時、腹をすかしていた私は、結局はただ藏われていただけで、のちにまた民間に売り出されたりしたダイヤの一件が口惜しくて、

「せめて、一粒くらい残しておけばよかったのに」

と、母に愚痴を言ったことがある。

「済んだことは仕方ないじゃないの」

母はけろりとして言った。

とにかく、幼いころの私は、母の化粧台の引出しにごろごろしている硝子細工の贗の大粒のダイヤを見て、家は**ずいぶん**お金持なんだなあと**思った**ことは**事実**である。

そのころは、病院の再建も順調に行っていて、殊に世田谷の梅ヶ丘につくった新病院（私の子供のころからそちらが本院になっていた）が発展し、私の家はまあ中産階級の上といったところであつたらう。しかし母のダイヤは、祖父が大病院を有していたころに買ってもらったのが大部分だつたと思われる。

さて、階段を昇って左へ折れた突き当りが、父の部屋、書斎、書庫をかねた部屋であつた。そこにはちょっとした古本屋を上まわる本が貯蔵されていた。

部屋自体からして、天井がたいへん高かつた。四方の壁際には作りつけの本棚があつて、上方の本は高くて手がとどかぬから、移動できる梯子が作りつけてあつた。

室内の中央も、ずらりと高い本棚が林立し、人はその間を横向きになつて通らねばならなかつた。それでも足りずに、床のうえに積み重ねられている本もずいぶんと多かつた。

部屋の片側に、鉄製のベッドがひとつ置かれ、ここが父の寝る場所、或いは昼寝をする場所であつた。一風変わったところは、冬でも白い汚れた色の蚊帳が吊つてあつたことである。父は晩年、山形の大石田に疎開したが、ここでも季節を問わず蚊帳を吊り放しにしていた。蚊帳のなかのほうが、「籠った」感じで、気持が落ち着くのであろう。「引き籠る」のは父の性分であつた。

なおこの部屋は床が板張りで、ねずみ色の絨氈が敷かれていたと思う。戸は洋式のドアであつた。そしていちばん奥のどんづまりに、畳が二畳だけ敷かれ、さして大きなぬ和机が置いてあり、ここで父は仕事をした。

られるようになったのはかなり後年になってのことだったと記憶する。

電話といえば、もう七、八年まえのことになるうか、アメリカのワシントンで、三週間ものあいだ、真夜中に電話のベルで起きた人が続出し、あまりうるさいので警察に調査を頼んだ。警察は犯人を逮捕したが、それは一匹の猿であった。その主人は仕事で夜おそく帰る。そのあいだに猿が電話器をイタズラしていたのだ。むかしの電話なら、こうした事件も起らなかったであろう。

私には兄、姉、妹が一人ずついた。そのうち姉と妹はいまこの世にいない。兄は十一歳年上だったから遊び相手にはならなかったが、姉と妹はそれぞれ二歳違いで格好な遊び相手だった。

そのうえ、ほぼ同年齢の——一人はかなり年下だったが——従兄弟が三人いた。

彼らが遊びにくるときが私の最大の愉しみといえた。正月なら、スゴロクをやる。むかしの家の暖房は、火鉢かせいぜい行火あんかくらいであった。私の家には炬燵がなかった。それでも、冬のさ中に汗をかくほど夢中でサイコロをふった。「上り」のすぐ手前までできているのに、なかなかその目が出ない。

従兄はそういうとき、サイコロを手で握って、

「チチンプイプイ」

と祈ったものだ。

また、私たちの寝るところになっている七畳半の部屋で、「鬼さんこちら」をやった。そうい

うとき、私は立っていないでびたりと壁際に横になり、鬼をはぐらかす方法を発明した。目隠をした鬼は手を前方にさしのべて追ってくるから、足が必然的にうしろになり、その足にぶつかって捕えられるということは意外に少ないのである。

また、「幽霊」のなかに描写した、応接間を完全に真暗にしておいて、そのなかで鬼ごっこと隠れん坊を合せたような遊びをやった。あのころの忘我の昂奮、動悸を未だに私は思いだす。そして、それを神話の金の時代だとしても思うのである。

従兄弟たちが泊ってゆくこととなると、七畳半の部屋にずらりと布団を敷いて一緒に寝た。しかしそれまでの遊びの昂奮が覚めず、布団にもぐって突つきあったり、夜ふけるまでなかなか寝つかれなかったものだ。そういうとき、古くからいる婆や（松田の婆やと私たちは呼んでいたが、つまり「榆家の人びと」に登場する下田の婆やである）が、でっぶりと肥満した体を現わして、私たちを叱りつけるのだった。だが、あくまで優しさをこめて、である。

ふだん、私は松田の婆やと一緒に布団に寝た。彼女は兄、姉と母親代りに育ててきて、そのころは私がその溺愛の対象となっていた。私はよくおねいふをした。彼女はよく注意していて、真夜中、朦朧とした私を起し、枕元においてある硝子製のしびんで私に用を足させた。

私の家の男の子たちは、伝統的に小学校の末までおねいふをした。その伝統の基盤になったのは父である。父は山形県の田舎から上京して祖父の養子になったのだが、この秀才はなんと中学生になってからもおねいふをしたという。

当時の他の遊びについて記すなら、たとえばいろはガルトであり、紙の模型飛行機であり、ま

た姉や妹だけと遊ぶときには、私は女の遊びであるお手玉や綾取りをした。

また、ふしぎな歌もうたった。たとえば私の名、宗吉をからかうときには、

宗ちゃんソがつくソン左衛門

ソン公のソンぶくれ

ソンかーけて、ソンちょこソンちょこ

などとうたわれた。

なお、いろはガルタについては、山路閑古氏によれば、漱石におもしろい挿話がある。彼は子供といろはガルタをやった。いわばおは、この得意札が二つあって、それは「あたまかくして尻かくさず」と「尻をひって尻すぼめ」であった。漱石はいつもこの二枚を膝のまえに並べて睨んでいるのだが、たいていは子供に抜かれてしまった。これはわざと子供に取らして、子供を喜ばせるためであったという。漱石はふだんは気むずかし屋の権化であったが、そういう優しい一面もあった。これは私の父も一面似ている。

そのうちに私も幼稚園生になる年齢に達した。現代のごとく、よい幼稚園に入るために受験戦争のある時代ではない。幼稚園は入学する児童が少なくてピイピイしていた。そのため、四月の入学期が迫ると、近くの南町幼稚園の園長先生が菓子折を持って私の家にも挨拶にきた。しかし、私は菓子だけ食べて、幼稚園に行くことは断乎としてしなかった。

私の兄もかつて幼稚園に行くのが嫌いで、さんざん泣いて家人を手こずらせたという。私もそ

の伝統をくんだわけだ。父も母もそれぞれに自分のことに忙しく、無理に私を幼稚園には入れなかった。

当時の幼稚園でも、片仮名でイロハニホヘトくらいのことは教えていたらしい。幼稚園に行かなかった私は、小学校へ行くまでそれさえも——おそらく自分の名くらいを除いて——覚えなかった。

その代り、一人の書生が、

「坊ちゃんには日本でいちばんむずかしい字を教えてやる」

と言い、壽という漢字を書いてみせた。コトブキはべつにいちばんむずかしい字ではない。それでも私は、夢中になってそれを真似し、ついに覚えこみ、ずいぶんと得意であった。

幼稚園に行かなかったことを私は少しも後悔していないし、その当時であつてはむしろよかったように思う。なぜなら、いざ小学校へはいって、「サイタ サイタ サクラガサイタ」という教科書を習わされたとき、それは私にとって未知で新鮮であつたから、私は勉強した。そんな片仮名はどうに知っている者は馬鹿にして、やがて教程がすすむにつれ、かえって遅れるようになった。そうした例をもう一件、私は知っている。中学にはいったとき、同級に混血の少年がいた。英語が少ししゃべれる。そこで、やさしい教科書をよう勉強しようとせず、そのうち、英語でも劣等生になった。

私の通った小学校は青南小学校であつた。今ではたいそうな名門で、なかなか入学できぬらしい。しかし、私のはいったころは、志望者はほとんど入学できた。だが、先日、小学校友だちの